

3517 地球のかおり 「赤土道の静寂」：状況と心模様①

潜む数々の悪条件と試練、知らぬが^{ほとけ}仏。

余分なことを知らなかったのが幸いした。未知への挑戦。冷や汗が出る。

地図一枚と大雑把な情報、先入観を持たず、たった一人、

広大なオーストラリア北西部を^{さまよ}う。無事帰還できた。

何とラッキーな体験だったのではないか。

未知との遭遇、数々の試練、だから、思い出深い旅になった。

広大な大地の距離感や内陸の未整備の道路の危険度。あるがままの大自然。

卓上と現場での体感は、まったく違った。

日本からシンガポール経由、西オーストラリア、パースに到着。

季節は日本の夏。インド洋に沈む夕陽の絶景。

サンセットコースを左に、北上を開始。

オーストラリア大陸の西北、モンキーマイアをめぐらした。片道 800 キロ。

このビーチには、野生のイルカがやってくる。

ユネスコ世界遺産に指定されているシャークベイ一帯。

ここに来る道中でも、ピナクルズ、

赤土の大地の中に、奇岩群がある。初めての光景。

長さ 110 キロ、深さ 10m、にわたり、

真っ白な貝殻が敷き詰められたシェルビーチ。

この西オーストラリアのひとり旅、

これまでの旅とは少し事情が違うようだ。

感動と背中合わせに、危険が一杯ありそうな予感。

反面、面白そうなのも事実。

ファイトがわいてきた。危険の一つに、広大さと距離感、時に恐怖となる。

この先の領域は、遭難や行方不明になる人が多いと聞いた。

緊張感が走る。それでも好奇心が勝った。

もし確かなものがあるとしたら、積み重ねた自分自身。自己責任の旅。

地図と車以外、何も頼ることは出来ない。

何しろ一人。途中で何があっても連絡不能。

覚悟して、旅立つことにした。

この旅の第一印象、パースの街が魅力的だった。大変気に入り、

素敵なレストランでの食事も美味しかった。

アイシャルリターン、なんて冗談を。

そして、北上。インド洋の風を感じながら開放感いっぱい、

車をぶっ飛ばすのは実に爽快だった。

モンキーマイア、このままパースに引き返しても

素敵な楽しい思い出が残る。それでも往復 1,600 キロ。京都東京間は約 500 キロ。

私は欲張りだった。旅に出ると変わる。

思わぬ力と運が働くのである。自己暗示の部分もある。

結果、引き返していれば、この光景に出遭えなかった。

旅らしい旅の体験が半減しただろう。

好奇心が勝り、恐ろしいほどの長い道中になった。

何しろ好きな事をやっているのだから、なんとも楽しい。

数々の試練の一つに、暑さ、いや、熱さがある。

モンキーマイアに到着した時には、

肌がヒリヒリする。すでに、真っ黒になっていた。並の日差しではない。

しかし、あまり気にならなかった。当然だという思いがあった。

やがて、焦げてしまい、元に戻らないのではないか。

それほど強烈。心配になってきた。

やがて、単なる炎症ではない。裸になって、ますます焼けてひどくなる。

身体中が痛み出した。綿シャツすら、触れると強烈に痛い。

日本から持参した日焼けクリームや薬が役立たない。現地でも購入した。

ともかく、戸外に出るのが恐ろしくなる。

予約などなし。朝夕の活動に切り替えた。

しばらく、ここで滞在することにした。エクスマウスにも出向いた。

やがて、人間には適応力があるのか慣れてきた。痛みもやわらいだ。薬も効いてきたようだ。

素敵な光景にも助けられた。気持ちも落ち着き、正常に戻った。

覚悟して、先に進むことにした。

季節は乾期、この地域の乾季は、5～10月。炎天下である。のどが渇く。

日陰になるほどの大きな木もない。ともかく、日差しを避ける場所が、^{まった}全く見当たらない。

想像以上に厳しそうである。水の問題、食糧、危険に対して、準備できるものを準備。

念には念を入れて準備。特に、車は^{いのちづな}命綱。、最大の配慮をして出発した。

夜間運転、それがまた、問題を生む。

一難去ってまた一難。夜道を走る恐さを知った。

夜間には、動物が飛び出してくる危険があると耳にしていた。

事実、遭遇したが、慎重運転で、難を逃れた。

どうしたものか、急ぐ旅ではない。

街らしい街はない。目的地もはっきりと決めていない。

しばらく、慣れることに努力した。

街から街というより、ガソリンスタンドからガソリンスタンドまでの距離は、

300～400キロ、離れているのが普通らしい。

少しヤバイ。やばいどころではない。

遭難者も多い。乾期で、天候が比較的安定しているので助かる。

天候の急変は避けられない。舗装された幹線道路、業務トラックと冒険野郎だけ。

車の通行はほとんどない。人が住める場所は限られているようだ。

逆に、好奇心がかきたてられた。

いつもそうだが、夢や理想だけでは何ともならない。

頭の中の理想は、現実の溝。車の中の温度も、日本の暑さの比ではない。

クーラーなどきかすと、オーバーヒートになる危険がある。

人間様だけではない。車が心配になってきた。

車も、この暑さ、いや、この熱さには言葉は話さないが、大変に感じているだろう。

この配慮が、のちに、身を助けることになった。

つまるところ、たった一人の独特のスタイルの旅である。

何でもできないと困るという状況。自動車についての予備知識や体験を持っていたので、

無事生還できたという側面もある。何しろ僻地、給油所もドライブインのように

設備が整っているところは限られる。

ある程度、パースを出発する前に耳にしていた。

ガソリンやブレーキオイル、エンジンブレーキ、水事情、

少々、点検はできる。エンジン音にも耳をかたむける。乗っている車に、ガソリンを満タンにすると、どの程度走行できるか、オイル交換は、どの程度で、設備はあるのか、どこで出来るのか。しかし、実際、故障が発生すると修理の技術はない。予兆を知り、無理をしないことが最良の方法。

世界を旅していると、コラムシフトもあれば、車種も多い。車はすべて、オートマティック車とは限らない。新車、新古車、中古車、いろいろある。故障することも計算しないとイケない。事実、何度か体験している。都会の中の好条件下で走行するわけではない。そのような状況に対応するように設計されているのか。リセットして取り替え、という安易な考え方は通用しない。考えれば、何が起こるかわからない。心配してもきりが無い。そんな条件下でのひとり旅である。反面、この先に何かあるのだろう。不安もあるが、どんな出会いがあるのだろうという好奇心でワクワクしたのも事実。普通、この道程なら、飛行機の移動だろう。映画「クロコダイル、ダンディ」さながらのワイルドライフ、映画「オーストラリア」人の住む街をすこし離れた郊外の光景は、今も変わらない。

ノーザンテリトリー、パースからダーウィンへの道。あまりにも長距離。幹線すら舗装されていない道路もあった。標識間の距離も長い。いや、無いに等しい。迷い込むと危険。遭難、行方不明になる人も多いと聞く。赤土の地道走行、真っ青な空と朱の道、広大な地。初めて見る、実感する光景。何とも楽しい。好奇心や冒険心をくすぐる。ちょっとだけ、と車を離れて歩き回ることも度々あった。背の高いブッシュになったところもある。見えるはずの道路や車が消えて、見えない。方向感覚もうっかりするとやばい。事実、そうだった。

内陸に入ると、エアーズロックのような岩肌も見かける。砂漠もある。

ともかく、油断ができない。

この作品のように、延々と、何もない同じ景色がつづく。

この右に立つ一本の木の存在。木の影がある。

何と好ましく思えたことか。

この木、目印になるようで、広大すぎて目印にならない。

同じような木がいっぱいあるからだ。同じような道が、日本の本州を貫いているようなもの。

この壮大で、広大なオーストラリア大陸。

圧倒されただけでなく、広大すぎて、恐怖を感じてきた。

この赤土すら、砂漠のようなもの。

粒子が細かく、パウダーのように砂塵が舞い散る。

風向きで窓が開けられない時がある。車内は実に暑い。

外は、同じ景観で広大、単調になる。

自分の気分を優先すると、とんでもないことになる経験もした。まさに、油断大敵。

キンバリー高原での体験、帰還した今だから言える。

道に迷い、駐車した場所に戻れない。途方にくれた体験がある。

小高い茶色の岩肌、あそこに登れば何が見えるか。

景観に見とれて、次の小さな丘にもと、

夢中になってしまった。目印はつけたつもりだが、方向感覚が狂ってしまった。

ほんのちょっとのつもりだった。気軽に考えていた。

方向感覚を取り戻すのに必死になった。

やみくもに動けない。目印をさがした。

あとで考えると、ますます方向がずれてしまっていたようである。

全く、別な場所に出てしまった。車も人も通らない。道のように道らしくない。

まさに途方にくれた状況になった。万事キュースかも。

炎天下、のどもかわく。自分の不注意。泣いてもどうしようもないが、

泣きたい気持ちになった。

気を取り直して、冷静に、冷静に、と一呼吸。心を落ち着けた。

晴天の空には、目印はない。時間も経つ。

まだ、この時は、日が暮れるような状況ではなかった。

開き直って、目をつぶった。落ち着くこと。山より大きな獅子は出ない。
大丈夫、きっと戻れる。何か勘違いしているのだ。
どの局面で間違ったのか、思い出そうとした。そして、見通しの良い場所へ少し移動。
平常心、体と心と呼吸を整えて、と言い聞かす。
次の一手を考えつづけた。やがて、どれだけ時間だったかわからないが、
はるか遠方に、豆粒ほどの物体が見えた。
自動車らしい。すると、あそこに道路があるらしい。幹線なのか側道なのかわからない。
しかし、自動車道がある。こちらに来てくれたら、道を尋ねられるのだが…
こちらに来るかわからない。道がどのようについているかもわからない。
無人島で、狼煙^{のうし}をあげるようなもの。人がいるとは、よもや思わない状況にある。

まさに、映画のワンシーン、ドラマである。
おんぼろのピンクのキャデラックのようなオープンカー。音楽をボリュームいっぱい、
近くを通りそうである。走って行って手をふった。超ラッキー、気づいてくれた。
それだけでは、走り去ってしまうかもしれない。
手を合わせて、おがむような仕草をした。ボディランゲージが役立った。
方向を変え、近づき、停車してくれた。
ここはブリティッシュ英語圏、なんとか片言で伝わった。真っ黒に日焼け、両腕には入れ墨、
外観は不安いっぱいだったが、ここに留まっていたは助からない。
Where am I どこにいるのかわからない。駐車した場所を、一生懸命説明した。
若者だから良かったのか、土地勘があったのだろう。ピンと来たらしい。乗せてもらった。
駐車した所まで、親切に送ってくれた。
まったく、逆な方向に出ていたようで、時間がかかった。
同じような景観が続く。見分けがつかない。距離感も錯覚。駐車している所に戻るまで、
少し不安だった。一つの局面で状況が変わる。有難い体験である。

自然状況や天候も左右する。乾期だった。砂漠の中で車を走らせるようなもの。
砂塵ならぬ、細かい赤土の粉塵が舞い上がる。想像以上に細かい粒子。
アラスカで、カメラ一台、駄目にしたことがある。
美しい景観との出会い、いいことばかりとは限らない。厳しいことが多いように思える。
旅も人生も、思い通りにはいかないが、負の連鎖、悪循環をつくらない工夫と努力。
私の体験ではないが、ある先輩の話が思い浮かんだ。

砂漠を旅した時、マスクをするように注意されていた。息苦しくなり、少しマスクを外した。
その時、一陣の風が吹き、砂が舞い上がり、口に入った。
口の中がじゃりじゃりした。日本に帰国した。その後、あるとき、血を吐いた。
無理をしてきたこともあり、余命いくばくもないと判断し、遺言書まで書いて覚悟した。
そして、ある日、口から虫が出てきた。
吸い込んだ砂の中に、幼虫の卵が含まれていた。卵がかえり、幼虫になった。
日本も肥料が人糞の頃、野菜に回虫の卵、そんな記憶がある。

常識など通用しないことがある。カナダで草にかぶれ、膝下の足だけで助かったが、
日本の薬では治らない。カナダの病院を訪ねた。
ぬり薬をつけて、治るまで1ヶ月かかった。人生も旅も、何が起ころかわからない。
この作品の道路で、小の生理現象、設備はまったくない。
道路脇の草むらに入って行った。何か動いた。保護色でわからなかった。
1メートルもあるトカゲだった。石か何かだと思っていたので、驚いたのは言うまでもない。
歩行も遅く、危険がなさそうなので一安心。
そんな体験もある。所変われば品変わるという次第。

広大さ、水、地道、灼熱… 我が身だけではない。二人三脚の車も心配。
ガソリンもうっかりできない。つねに満タン。クーラーに配慮したのは言うまでもない。
車の水のチェック。前にラジエーターが付いていた。
うっかり蓋^{ふた}にさわると火傷^{やけど}をする。熱湯が吹き出る。炎天下である。冷めるはずがない。
水の補給は絶対条件。パンクもある。タイヤ交換も必要。
何しろ、1日、800キロ、移動することもある。スピードを上げることも多い。
蚊のような虫が、一定以上の高速走行をすると、逃げられず、車と衝突、前面にこびりつく。
その清掃も大変。こまめにしないと、目詰まりしないかと心配になるほど。
内陸部に入ると、虫も増え、さらにひどくなる。
食料の準備もある。幹線にショッピングセンターなどない。
内陸に入れば、人すら住んでいないのではないかと… 今は乾期、最悪、車中宿も可能。
夕暮れになると、カンガルーの家族が歓迎してくれる。
心なぐさめられ大変ありがたい。、道路から中に入るのは危険とってしまう。
大きなトカゲ以上の危険があるかもしれない。ガラガラ蛇もいるのだろうか。
想像が過ぎると旅は続けられない。結構楽しんでいる。初体験、新発見、新しい出会い。

この作品の前後に、まだまだエピソードがある。

道路脇には、大きな動物の死骸がころがっている。何か所かで目撃した。夜道に、動物がライトに近づいてくるのか。車の前にガードの鉄棒が付いているのが理解できる。

こうした旅を選択する限り、自己責任、自己判断しかない。

100%の安全が、難しいでは、私は困る。外務省、邦人保護課、安全センターの所長が、その時点、無事故で、地球4周も一人旅したことに驚いていた。

局面が変わる。楽しみながらも油断大敵。緊張感が必要。最初の旅は4キロ、^や瘦せた。しかし、また、行きたいと思うほど、冒険の旅は楽しい。

眼前には、延々と同じような道が続く。

単調になると危険。変化がないと感覚が狂うもの。自分との戦い。

幸い好奇心が強いので助かる。退屈しない。

再三の途中下車は、同じ姿勢をしているので、身体のためである。

それにしても、同じ景観の一本道がつづく。

リズムをつけることも大切。時には、道に腹ばいになり、撮影する。

地図上では、海岸線が近くなると、海を見に行く。

もうここは、インド洋ではなく、ティモール海に来ている。

車も酷使している。身体も酷使している。パースに戻るには、約5,000キロ。

これ以上、先に進んでも際限がない。日数も無限ではない。

余裕を持って楽しむことが、旅の秘訣。

帰路は、往路と違った道、ワンパターンでない選択。

引き返すタイミングと判断した。

海岸線には魅力を感じていたが、一度でいい。

内陸部も興味津々。パースの南部にも興味がある。海岸線もある。

そして、縦断を決断。中央部への挑戦。予定は未定。

臨機応変。蚊のような虫の大群。車の前のラジエーターの部分、色が変わるくらいこびりついている。

思いつくまま書いていると際限がない。6310文字。モノ書き落第。

起承転結もあったものでない。ご容赦。思いつくままに。